

草庵仏教

第151号
(発行日)
2003年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyout3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会
毎月22日午後2時
.....
- * 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
- * 8月の同朋の会は休会

随喜と憎嫉

G 「仏教のお話の中で随喜という聞きなれない言葉があります。が、どういう意味ですか」

D 「随喜とは随はしたがう、他者の善にしたがって喜ぶことです」

G 「他者のなす善い行いを共に喜ぶのですか」

D 「他者の善なる行いを見て『よいうやってくださった。有り難いこと、尊いこと』と我が事のよりに喜ぶのです」

G 「人の善き行いを心からほめたたえるのですね」

D 「ええそうです。この随喜はことに勝れた善であると仏教では教えられています。昔、金子大栄先生のご講話で一つの仏教の逸話をお聞きました。正確な事柄は忘れましたが、およそこんな内容のお話だったと記憶しています」

G 「どのような話ですか」

*

D 「昔インドのある王様が城の廻廊の壁を絵で飾りたいと思い、国の中で最も優れた二人の絵師に、廻廊の両側の壁に絵を描かせました。壁は向かい合っていて、一方の壁を絵師Aさんが担当し、向かいの壁はもう一人の絵師のBさんに描かせました。幾日かたって、王様はどれだけ

描けているかを見に行きました。

Aさんの絵はだいぶ描けていた。ところがBさんの担当している壁はまだ絵は一つも描かれていませんでした。Bさんは壁を磨いているだけでした。また幾日かたって王様は壁の絵を見に行きました。Aさんの壁の絵はほとんど完成していました。

ところBさんはあいかかわらず壁を磨いているだけでした。不審に思った王様はBさんに尋ねました。「お前はなぜ絵を描かないのか」と。Bさんはただ『Aさんの絵は素晴らしい』とAさんの絵をほめるばかりでした。それから絵が完成したというので早速王様は見に行きました。Aさんの描いた絵はそれは見事に描かれていました。そしてBさんの方の壁を見ました。驚いたことにAさんの描いた絵がそっくりBさんの側の壁に映し出されていきました。ピカピカに磨かれた壁にAさんの絵が見事に映し出されて、Aさんの描いた絵よりも一層幽玄な美しさを放っていました。そこで王様はBさんにたずねました。『どうして壁を磨くだけにしたのか』。Bさんは応えました。『Aさんの絵があまりにもすばらしかったからです』と。

こういようなお話でした」

*

G 「このお話が随喜と関係があるのですね」

D 「ええ、Aさんの絵を見てそのすばらしさに感動し、ほめた。たえる、その行為が壁を磨くことになったのですが、磨かれた壁にAさんの絵がそっくりそのまま映っていたということ。しかも磨かれた壁に映っているAさんの絵がAさん自身の描いた絵よりも更に美しかったという点、それが意味深長です」

G 「このお話に大事なことが教えられているのですね」

D 「そうですね。二つの大事なことが教えられています。一つは、純粹に相手の善をほめた。たえることは必ずから相手の善の徳が随喜している本人の徳になるという点です。これはAさんの絵がBさんの側の壁に映し出されたことに表わされています。それからもう一つは、随喜する功德はほめられた人の徳よりも大きいということです。これは映し出された絵は元のAさんの原画よりもおもむきが深くてより美しかったという話に表わされています。この点について、龍樹菩薩の作と言われている『大智度論』に、善行をなす本人よりもその善行を随喜する人の方が功德が大きい、と説かれています」

G 「なぜ善を行った人の功德よりもその人の善を随喜した人に与えられる功德が大きいのでし

ようか」

D 「それは、我愛・我慢の自我心が強いと他者の善を心から随喜して讃嘆することは出来ないからです。ですから自我意識を離れた随喜の善を、より価値の高い善とするのです」

G 「たしかに他人の行う善行とか、功績とか、幸せを本心からほめたたえたり、共に喜ぶことは難しいですね。相手の歡心を買ったためとかへつらいから本心をかくしてほめそやすことはよくありますが」

D 「口先だけでほめるのはいうまでもありませんが、心から相手の善や徳や幸せをほめたり称賛したりしているつもりでも内心にはねたみやそねみややっかみの心がうごめいている場合が多いですね。そうなる場合随喜とはいえません。難しいけれども随喜にあやかりたいし、近づきたいですね。そういう随喜の人がいますが本当に尊い人だと思えます」

G 「他者の徳を随喜出来る人はなんと清らかな人でしょう」

*

D 「人が善いことをするのを見て心からたえ、それとともに喜ぶ人、そのような人が、社会をおのずと浄めているのではありませんかと思っ

G 「目立った善行はしていませんが、他者の善行を心からほめたたえる人、そういう人がかえって本当に世の中を浄化している

のではなからうかといわれるのですね」

D 「ええ、この世の中の空気が清くさわやかになるのは随喜のような行いによってではないかと思えます。無量寿経には、浄土の菩薩は『嫉心を摧滅せり、勝るを忌まざるがゆえに』」

(菩薩たちは嫉妬心を滅ぼして、人をねたむようなことがない)とあります。他の勝れていることを少しもねたまないというのです。それが浄土の菩薩の心なのです。自我心のない無我の心です。ところが同じ無量寿経には凡夫の悪しき生き様を説く段に

『善人を憎嫉し賢明を敗壞す。傍にして快喜し』

(善人をねたみ賢いものをおとしめて、自分は陰にまわって喜んでい)

とか
『人の善あるを見て憎嫉してこれを悪む』

(人が善いことをするのを見てねたんで憎む)

と説かれています。嫉心をほろぼして随喜の徳をそなえている菩薩とは対照的です。この菩薩の姿に照らされて、自らの凡夫・悪人たることが知らされます」

G 「私自身、他者の善や徳や幸せをねたんだり、うらやんだり、時には憎んだりきらつたりしていないかという、イヤとは言えないですね」

D 「随喜の教えは私どもの姿を照らし出してくださいませ。教えられないと悪の深い凡夫の身であるとは知れないものです」

*
G 「それはそうと嫉心は無くなりないのでしょいか」

D 「嫉心は我慢我愛の煩惱が根になっていきますから、この世で取り除くことは非常に難しいことだと思います」

G 「嫉心は無くならないけれど、しかし少しなりとも嫉心から解放されたいのですが」

D 「それは可能ではないでしょうか」

G 「少しずつでも嫉心を浄化して随喜が可能とすれば、それはどういう道ですか」

D 「嫉妬心というのは、まず自分自身の人生に満足感が無い場合に、より強く起こりやすいと思います」

G 「これはよく分かります。自分の人生に充足していると他者の幸せをうらやましいと思うことは少なくなるのは当然ですね」

D 「ですから人の幸せや善をねたむのではなく、自分自身の幸せを確立することが先ず大切です」

G 「自分が腹一杯だと人の物をほしがったりうらやましく思うことはへりますね」

*
D 「もう一つ大事なことがあります。それは自分の愚悪性を知ることです。自分がたいした人

間だとうぬぼれているから、自分の境遇を不足に思い、他者の栄光をうらやむ心やねたむ心が起きやすいのです」

G 「自分の中にある自我の高ぶりがあると、自分の境遇に満足できず感謝もできなくなってしまうのですね」

D 「そう思います。自分の愚かさや粗悪さを感じれば感じるほど、いまここに生かされていることがもったいないことだと感じられてきます」

「生かされていることへの感謝がわくというお話ですが、そこをもう少し具体的におっしゃってください」

D 「顔を洗う時には水が恵まれ、自分に徳もないのに食事を頂いている。寒い時は暖房してもらい、着る服は十分に用意されている」

G 「なるほど水も食事も暖房も徳のない私に十分に与えられているなどという感謝ですね」

D 「ええそうです。ただこのようなことはまだ外の恵みです。もつとも大事な恵みは南無阿彌陀仏の恵みです。この恵みによって人は人生を底の底から満足が与えられ、外のさまざま恵みにも感謝ができる徳ともなつてくださるのです」

*
G 「いろんなものを感謝する心が南無阿彌陀仏から与えられるのですね」

D 「曾我量深先生のお言葉に信

心を頂くというのは『いただく心をいただく』というのがあります。感謝する心は自我からは起こりにくい。感謝する心は南無阿彌陀仏を頂く信心の功德としてたまわるのです。感謝する心もない私にものごとに感謝する心をいただくのです」

G 「賜った信心の徳として、人生やものごとで感謝することのできる心をいただくのですね」

D 「ええそうです。そしてこの南無阿彌陀仏にあわして頂くことがまつたくの恩恵です。あうべき人間としてあつたのではなくて、あう資格も能力もないにもかかわらず恵まれたのです。聖人はご消息に

『まして、おのおののようにおわしますひとびとは、ただ、この誓いありと聞き、南無阿彌陀仏にあいまいらせんことこそ、ありがたく、めでたくさうろう御果報にてはさうろうなれ』

と書かれています。南無阿彌陀仏にあわせて頂けること、そのことこそが私ども一人一人にとってこの上なくありがたくめでたい幸せなのであると仰せられるのでしよう」

G 「おのおののような人びとは私たち凡夫のことなのでね」

D 「ええ、そんな者がはからずも南無阿彌陀仏にあわせて頂いた、これほどめでたく有り難いことはない。なんとという幸せ者であろうか。愚かで悪の深い者として、お念仏にあう資格など

一つもない者が無上の功德にあわせて頂いた。これほどの恵みをいただいた者がまだ何が不足で人の幸せや栄光をねたんでよかるうかよいはずはない、と聞かせて頂くのです」

G 「にもかかわらずねたみ心が起こったりうらやむ心が起こったりする私です」

D 「そうなんです。それだから底下の凡愚といわれるのですね。本当にドウしようもない人間です。そういう愚悪の深い者もお念仏にあわせて頂いて最高の果報者とされる。そこに他者の善や幸いをすなおにとともに喜び、憎嫉の心から次第に解放されていく道があるのでないでしょうか」

G 「自らの愚悪性を知らない橋慢心は自らが恵みに中にあることを知らず、人にまさる幸せを得なければ承知しないのです。それゆえに他者の徳をたたえることもできず、他の善を喜ぶこともできず、他者の幸せをねたむのですね」

D 「そういうことですね」

G 「自分の愚悪を知らされ、南無阿彌陀仏の恵みをたまわって、人生にまことの充足が与えられる、そこから次第に嫉妬心が浄化されてくるのだとうかがいました」

聖典講座

『歎異抄』第十二章第八講

たまたま、なにごころもなく、本願に相応して念仏するひとをも、学文してこそなんどいいおどさるること、法の魔障なり、仏の怨敵なり。みずから他力の信心かくるのみならず、あやまって、他をまよわさんとす。つつしんでおそるべし、先師の御ころにそむくことを。かねてあわれむべし、弥陀の本願にあらざることをと云々（歎異抄第十二章より）

現代語訳

（たまたま何のはからいもなく本願のおころにかなって念仏する人に、教典などを学んでこそ往生することができるといっておどすのは、教えをさまたげる悪魔や、仏に敵対するものすることです。自分自身に他力の信心が欠けているだけでなく、誤って他の人をも迷わそうとしているのです。つつしんで恐れるべきです、親鸞聖人のおころに背くことを。あわせて悲しむべきです。阿弥陀仏の本願のおころにかなっていないことを）

この章に提出されている異義は、往生のためには仏教の学問が必要であって、それをせぬ「経釈を読み、学せざる輩」は、「往生不定」、すなわち往生が不確

実であるというのである。唯円房はこれに対し、批判を展開していくのがこの第十二章である。

浄土往生のためには学問は必要はない。

ただ本願を信じ念仏申すばかりである。その本願を信じるというのも複雑なことではない。念仏往生の本願の願言すなわち仰せを素直に信じるよりないのである。「称えるばかりで助ける、引き受ける、その他に何もいらぬぞ」という仰せを「なにごころもなく」まうけに受けて、ナムアミダブツナムアミダブツと称えるばかりである。まことに単純至極である。これでこそ文字も読めぬ愚かな者も助かるのである。愚かな者も本願に身をゆだねて念仏するところに救いの道に入る。

ただし、智者や学者は己の学問沙汰をたよりにしている間は弥陀をたのめぬ。

「無知無能の愚か者」となつて、無学文盲の者と同座で救われる。己の修めた学問や高い知性をテコにして救いに与ろうとしている間は「我をタノメ」の大悲心はいただけない。一枚起請文の

「念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」との法然聖人のご遺言のとおりである。

法然聖人にはまた次のような常に仰せられていたお言葉がある。

「上人常の言にいわく。我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白も知らざる童子のごとく、是非知らず無智の者なり。ただ念

佛往生を仰いで信ず。釈迦は念仏して往生せよと勧め、弥陀は念佛せよ、来迎せんと、仰せられたり。この一事を信じて余の事を知らず」

これも一枚起請文と趣旨は同じである。法然聖人が「弥陀は念佛せよ、来迎せんと仰せくださり、釈迦は弥陀の本願に順つて念仏して往生せよと勧められてい

る」と仰せくださる、その念仏往生の願をいただくほかはない。我が身の往生が決定するのに我が知恵は役に立たない。

それはちやうど、白も黒もわかることのできない幼子（童子）のような者、そのような幼な子が親の言うことを素直にきくように、弥陀・釈迦の仰せを仰いで信じる他に助かる道を全く知らない、法然聖人は申されるのである。これは、親鸞聖人が

「ただ念仏して弥陀に助られまいらすべしと善き人のおおせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうままれるたねにてやはんべらん、また浄土にうまるべきたねにてやはんべらん、総じてもつて存知せざるなり」と仰せられたのと軌を一にしている。

*

木村無相さんは「なにごころもなく本願に相応して念仏する」というお言葉を非常に大事にされ、この点に関する領解のお手紙をいくどもいただいた思い出がある。学問もない愚かな人たちだけが「なにごころもなく本願に相応」するのではない。いかに学問を深くきわめようとも、ひとたび弥陀の本願をいただく段になると、「なにごころもなく本願に相応」するほかはない。まったく「浄土宗の人は愚者になりて往生する」（法然・親鸞）のである。

「なにごころもなく」というのは、私の側の思案工夫は一切いらぬ、いらぬいどころか邪魔であるとの意味である。思案や工夫を役立てようとするのがす

に、愚者ではなくて賢者になつて往生しようとしている姿である。己の愚者であることがわからないのである。

愚者といつても、他の人と比べて賢・愚の比較をしての話ではない。仏智に比べると人智はまさに愚であるというのである。

凡夫の愚かな知恵で「ああであろうか。こうであろうか。ああでもない。こうでもない」と頭をひねくり回している姿を聖人はご消息に

「往生は、なにごともなにごとも、凡夫のはからいならず、如来の御ちかいに、まかせまいらせられたればこそ、他力にてはそうらえ。ようようにはからいおうてそうららん、おかしくそうらう」と述べておられる。「おかしくそうらう」と言われるのは、「これほど有り難い阿

弥陀様のお誓いが与えられているのに、愚かなわれわれ凡夫が何をいまさら思案躊躇しているのか、笑うべきことである」とのおぼしめしである。

海におぼれかけている者に、助け船が来て、「さあお前を助けに来たから乗れよ」と親切によびかけられているのに、今にもおぼれそうな本人が「この船に乗って大丈夫なのだろうか、本当に岸まで運んでくれるのだろうか」とぐずぐず思案して乗ることを躊躇している姿を想像すると「おかしくそうらう」といわざるをえない。

「本願に相応する」の相応するとは本願の仰せにかなうこと、仰せのままであること、仰せの他に私の考えを差し挟まぬことである。「そのままなりで助ける、我にまかせよ」の弥陀の仰せをこの通りに聞いていることが相応である。仰せを真実（ホンマ）と受け入れていることで

ある。

本願の仰せを聞いてはいるが助からないのは、本願の仰せを本当と受け取れないからである、疑っているからである。だから本願が自分に生きて働かない。すなわち活性化しないのである。活性化しないから弥陀の功德が生きて我が身に働かないので、安心も喜びも充足もしない。

*

本願を信じるには学問をして本願の道理を良く理解しなくては往生は確実にならないなどというのは、親鸞聖人のお心に背き、弥陀の本願にたごうている。この異義を唯円房はきびしく批判をする。教えをさまたげる悪魔であり、仏敵であるとまで言われている。ここには教えをねじまげるいとなみに対しての痛烈な悲しみと怒りがにじみ出ている。

この点は蓮如上人も同様である。御一代記聞書に

「奥州に、御流のことを申しまざらかし候う人を、きこしめして、前々住上人、奥州の浄祐を御覧候いて、もつてのほか、御腹立候いて、『さてさて、開山上人の御流を申しみだすことの、あさましきよ。にくさよ』と、仰せられ候いて、御歯をくいしめられて、『さて、切りきざみても、あくかよ、あくかよ』と、仰せられ候うと云々 仏法を申しみだす者をば、『一段あさましきぞ』と、仰せられ候うと云々」

（奥州に、浄土真宗のみ教えを乱すようなことを説いている人がいるということをお聞きになって、蓮如上人はその人、浄祐を奥州から呼び寄せ、お会いになりました。上人はひどくお腹立ちで、「さてさて、ご開山聖人のみ教えを乱すとは。何と嘆かわしいことか。

何と腹立たしいことか」とお叱りになり、歯がみをしながら、「切りきざんでも足りないくらいだ」と仰せになりました。ご法義を乱すものごとを「とりわけ嘆かわしい」と仰せになったのです。）

こういう言葉を聞くあまりの激しさに私などはたじろぐし、非寛容だとの非難が上人に向けられかねない。しかし、これは仏法に身をささげ、護法の念に燃えているしるしでありあかしである。

私などはこうした骨がない。柔らかいだけでは法は流れない。人当たりはいいかも知れないが、それだけ法に対するいのちのかけりようが軽いのである。

法然聖人も親鸞聖人も煩惱具足の念仏者として生涯、自らの身を慚愧し感謝報恩に生きられたが、同時にまことの仏法を曲げる行為に対しては妥協を許さない厳しい姿勢で生きていかれた。今日の私たちは（物わりのいい分）、仏恩の深きことを感じていないのでは無かるうか。

*

なお戦前までは異義・異安心は僧籍を剥奪されるということもあった。しかし現在は、異義・異安心ということはまだ言われるにしろ、僧籍剥奪だの教団追放だのということはない。現代は、それぞれの人が自分の真宗理解を述べる時代であり、自由に述べることの出来る時代である。またお互いに自由に批判し合うことも出来る時代である。

このことはよく言えば昔のような教団中枢の教権的な狭いしめつけがなくなつたのであり、悪く言えば真宗と言つてもんでバラバラになりやすい。

*

このような現代においては教えを受け

る側から言えば、「どういう真宗の話」を聴くかは聞く人の判断にゆだねられている。それゆえ教えを聞く側のまなこ（眼）が今日は何に大事であると思う。松並松五郎さんから「誰の話でも良いというのはまだ自分の問題が大事になっていないからである。世間の習いごとでも、本気で習おうと思えば、教えてくれる先生を選ぶようなもので、どんな人でもいいというのは、習いごとに対して真剣さが無いのである」というお話をうかがった。聞法はそのつどのご縁で受け身に聞くだけでは徹底しないのである。我が身一人をひっさげて「我を救う教えはなきか」と自らが問題をもって求めて聞かねばならない。

（了）